
オレの知らない理奈

生成 環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレの知らない理奈

【Nコード】

N4992C

【作者名】

生成 環

【あらすじ】

夏の暑い午後、オレは気がつくと、亡くなった妹の服を着ていた。オレのココロと体は、妹に乗っ取られるのではないか……。

（前書き）

夏ホラー2007に投稿した作品です。

オレは気がつく、妹の恋人の家の前にたっていた。オレは今、妹の服を着ている。といってもオレは女装の趣味はない。だが、原因は妹の理奈『りな』のせいだ。

事故で亡くなった、オレの妹の理奈……。

理奈は、オレのことが大好きだった。

「大人になったら、お兄ちゃんのお嫁さんになる」とオレにいていた。

理奈に恋人を紹介されたときも、一番はお兄ちゃんだからとオレにいった。それも、思い出のひとつだ。

もうすぐ梅雨が明けようとする晩に、理奈は車にひかれた。

理奈は、オレを見つけると、道路を渡ろうとした。オレは待つようにいった。

だが理奈は、オレのことを聞かずに、オレのところかけ寄った。

理奈が道路の真ん中にきたとき、雨でぬれた道路で車がスリップして、理奈にぶつかった。

オレの目の前で……。

オレは、倒れた理奈にかけ寄った。そばにいくと、理奈はオレにいった。

「ずっと、お兄ちゃんと、いっしょだから……」

これが、理奈の最後の言葉だった。

理奈の葬式が終わると、梅雨が明け夏がはじまった。

それからだ。オレの体とココロは、理奈に少しずつ乗っ取られていた。

はじめてそのことに気づいたのは、理奈の服を処分するので、ゴミ袋にいれて、ゴミの日に出したときだった。でも、次の日の朝、理奈の服は、理奈の部屋のタンスの中にあつた。なぜ、理奈の服をタンスにもどしたのかと母親に聞いたら、オレが理奈の服を、タンスにもどしていたと、母親はいった。

はつきりいつて、オレはそんなことをした記憶がまったくない。

それからだ。オレは気がつくと、理奈の部屋からCDやマンガなどが、オレの部屋の中に置いてあつた。

そんなことが、オレのまわりでたびたびおこり、日を追うごとにひどくなってきた。理奈がつかっていたサイフをもって外へでたり、理奈の腕時計をはめてたりしていた。

正直、オレは恐かった。

オレの時間より、理奈に体を乗っ取られる時間が、だんだん長くなってきていたからだつた。

そして、オレの恐れていたことがおきてしまった。オレは、理奈の服を着ていた。だが幸運にも、気がついたのが家の中だつた。

オレは、母親に見つかる前に服を脱いだ。

オレは、セミの鳴く声がうるさいので、気がついた。とうとうオレは、理奈の服を着て外に出ていた。目の前には、知らない家の前に

オレは立っていた。突然、ドアが開いた。オレは、ドアの前にいた男に見覚えがあった。男は、妹の恋人で、名前は清きよだった。

「どうしたのです。いったい……」

「とりあえず、家にあがらせてくれ」

「では、ボクの部屋の中で……」清はだったので、オレは、清の部屋でまつことにした。清の部屋は、きちんと整理していた。オレは、机の上を見た。そこには、理奈と清が笑っている写真があった。清も、理奈のことを愛しているのだと、オレは思った。

ドアのノックをする音がしたので、オレはドアを開けると、清が飲み物をもって立っていた。オレは、清がもってきた飲み物を飲んだ。それはむぎ茶だった。が、むぎ茶には砂糖がはいっていた。そういえば、理奈はむぎ茶が苦いからと、砂糖をいれていた。だからといって、オレにも砂糖のはいったむぎ茶をだすわけ。オレは、清に、砂糖をいれなくてもいい、というとしたとき、清はオレにたずねた。

「どうして、ボクの家に来たのですか」

「それはだなあ……」

オレは、正直に今までおこったことを、清に話した。そして、オレが話を終わると、清はオレにいった。

「鏡を見てないのですか……」

「見てないけど、それがどうした……」

清は、部屋の奥にある鏡をもつてくると、オレにいった。

「鏡を見て、はやく……」

清にせかされて、オレは鏡を見た。鏡にうつっていたのは……。

理奈がうつっていた。

「車で事故にあつて、亡くなったのは、理奈さんではなくて、理奈さんのお兄さんなんだよ」

オレは言葉が出なかった。理奈がオレに乗っ取られたのではなく、オレが理奈を乗っ取っていたというのか……。

「理奈さんが来るまえ、警察から電話があつたけど……。理奈さん、なにかしたの」

「知らない。本当に、オレは知らないんだ……」

そのとき、オレの意識が、ほんのすこしだが飛んだ。気がついたら、理奈の通っていた学校の中にいた。

でも、まわりにいた、夏休みなのに、クラブ活動などで学校に残っていた生徒らは、オレを遠巻きに見ていた。

オレは、窓ガラスにうつっている理奈を見た。

理奈の上半身が、真っ赤だった。

オレは、理奈が知らないうちに、どこかケガをしたのかと思ったが、そうではなかった。これは、返り血だった。

いったい理奈は、オレの知らないうちに、なにをしたのだろう……。遠くから、パトカーのサイレンの鳴る音がして、校舎のセミの声が消されていった……。

（後書き）

テーマにした「大切なものを失うことへの恐怖」をしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4992c/>

オレの知らない理奈

2010年12月10日07時07分発行